

「前田奉迎使渡航日記」について

川口 高風

明治三十三年五月二十三日から七月十一日まで暹羅国へ仏骨奉

迎に行った奉迎副使の臨濟宗妙心寺派の議事前田誠節の「渡航日記」を、前田の随行員であった高野山大学林教授上村觀光が「正法輪」第一〇三号（明治三十三年六月十五日）、第一〇五号（同年七月二十五日）、第一〇七号（同年八月二十五日）で「前田奉迎使渡航日誌（記）」と題して紹介している。タイトルから、前田自身の記したものを上村が修正して世に出したものと思われるが、内容をみると、上村の見たことや感じたことを報告しているところから、前田の手記ではなく、上村の手記と思われる。それを証することが「正法輪」第一一三号（明治三十三年十一月二十五日）に、上村が「余が草せし奉迎日記に就て」において述べている。

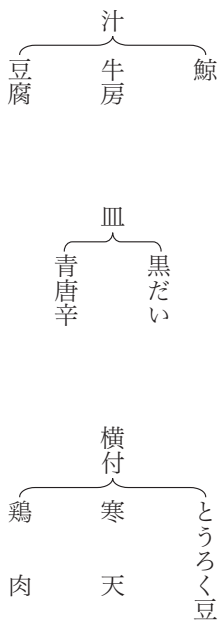
これによれば、上村は前田の随行員として入暹日記を記し報告することを考えていたが、本日記はあくまでも一般読者に向けての渡航日記で、自分の日記でもあったため管長及び各宗派に対し

「前田奉迎使渡航日記」について

ての復命日記ではなかった。初めは単に「渡航日記」であり、第一回の原稿を香港より「正法輪」の編輯者へ送ったところ、編輯者が上村の私記であることを知らず、誤って「前田奉迎使」の五字を加えてしまったという。上村はこれを遺憾といい、前田自身は出発前より復命日記を自ら記していたといわれている。

ところが、本稿に対し「教学報知」第四四三号（明治三十三年九月二十五日）に、清国福州に住んでいる某老師より奉迎使に対する批判意見が報告された。題名は「新教田に汚足を印す」とあり、六月四日の「渡航日記」に、

午食は一同日本料理を喫せり。



等なりき。異域の海上にありて此珍味を食ふ。……とある日本食料理の献立に対し、

果然前田誠節奉迎使は入暹紀行を世に公にせられ、奉迎使一行の洋食に飽満し、某の日に本国の料理を喫し候は、異域の海にありては甚だ珍味なりとて汁（鯨牛房）皿（黒鯛青唐辛）向付（鶏肉寒天）の献立を記し、仏骨奉迎に伴ふ一大名譽の如くに吹聴せられ候、誠に奉迎使の態度と行為は福建の伝道に向て一大妨害を与へ、不肖等が日本仏教の厳肅なるこ

とを鼓吹し、清国僧の頑夢を警醒する上に対し一大汚穢を与へられたるものに候間、国家と法門の為に緘黙を保ち難き事候。

といい、奉迎使一行は洋食に飽きたため、日本料理を異域の海で食べて珍味といっている。しかし、これが仏骨奉迎使の態度と行為かともいい、仏骨奉迎は僧弊助長の媒介になるとか、清国福建での伝道において、奉迎使の行為は利害があるという。さらに、這回のごとき汚穢非道なる足跡を海外の新教田に印せられ候は、法道に違背し国家と法門の為め害毒を与へ候ものなれば、この問罪の声は一人より幾万々人に伝へられ与論監視の勢力となり、将来を警戒し海外に関する事業は、一段の注意を要したきことに候。

ともいつており、厳しい批判意見ばかりである。しかし、この批判に対して、上村は先の「余が草せし奉迎日記に就て」で、在清国の某僧に対し「通常の頭腦を以ては解釈し難き非論理的文字を併列し」といい、日記に魚肉の猷立を記したことは、多少穩当を欠いた感はあるが、これは連日の洋行日記においては、多くみる所であり、精進潔斎こそ愚の極なりと述べている。

さらに、前田が事実上船中で肉食して香港や新嘉坡などへ上陸し宿泊したとしても、福建での伝道にどのような妨害があるのか、また、前田を非難して国家と法門のために緘黙を保ち難いと絶叫しているが、逆にその理由を聞きたい。奉迎使がいかなる点から汚穢非道であるか。いかなる点が法道に違背しているのかな

ど、無責任な言論をなすべきでない」と上村は某僧を批判しているのである。

続いて「教学報知」第四四五号（明治三十三年九月二十九日）でも、社説の「速かに大菩提会を破壊せよ」と題した記事で、

遊散の旅行に趣きたる奉迎使等は、白昼公けに彼の風紀を紊り、恣に彼の国俗を傷けて恥ぢず。酒氣満面貴族の門前に叱せられ、乱言噪拳同宿の外人に戒められ、夜陰に乗じて異境の醜業婦に戯れんとして、警衛の嚴なるがために果さざりしを遺憾として、声高らかに物語れるか如き、精進潔斎の法体を以て鯨汁や黒鯛鶏肉の珍味に舌を鳴し、公刊の文章に於て左も名譽らしく之を広告するが如き、陸に海に到处に醜声を伝へ、奉迎使は則ち請負師なり。菩提会は没落怪なりとまで批評せらるゝに至りたるは、何たる見下げ果てたる淺間しき不祥至極の沙汰にてあるぞ。……

といつており、常識では解釈できない滑稽な文字を羅列し、奉迎使一行を侮辱しているのである。それに対し上村は、盤谷府に滞在中以外、奉迎使及び随行員と起居をともししているため、「教学報知」の記者がというような風紀を紊し国俗を傷ついたりすることをどこでしたのか。あえて記者に問いたいという。

このように、上村の「渡航日記」における六月四日の日本料理の猷立に対し、二人より批判意見が出た。しかし、その批判は猷立のみならず、奉迎使一行の態度や行為、また、前田個人の批判から妙心寺派の仏骨奉迎に対する姿勢批判までも、さらには各宗

派協同の大菩提会の無用論にまで及んでいるのである。

そこで、この「渡航日記」を他の随行員⁽²⁾らが記した日記などと合せてながめてみれば、当時の様子をより詳しく知ることができ。また、奉迎使らの行動もより詳しく明らかになるであろう。それらは今後の研究に俟ちたい。

注

(1) 「正法輪」第一〇三号でのタイトルは「前田奉迎使渡航日誌」とあり、五月三十日に香港に着いた博多丸から送られたものである。続きが掲載されている第一〇五号、第一〇七号では「前田奉迎使渡航日記」となっており、ここでは「日記」とした。

(2) 仏骨奉迎に行った奉迎正使は大谷派の大谷光演、副使は本願寺派の藤島了穂、臨濟宗の前田誠節、曹洞宗の日置黙仙である。随行員としては曹洞宗より忽滑谷快天、本願寺派より三谷泰恩、臨濟宗より上村観光、大谷派より布教監督の石川馨、浅草別院輪番の大草慧実、真宗東京中学校教授の藤岡勝二、その他、松見得聞、浅井恵定、尾崎英吉、下間頼信、南條文雄らであった。

前田奉迎使渡航日誌(記)

随員 上村 観光 誌

五月二十三日、晴天、水曜日、午前九時三十分、前日来京都より来れる各宗委員を始め数千名の信徒より盛なる祝送を受け、馬車にて諏訪山の中常盤を出て税関波止場より正使と俱に県庁より差廻の小蒸汽に乗じ、絶へず打揚る煙火に気を勇ませ、楽隊の吹奏する音楽に対しては祝送者の心情の厚きを謝しつゝ、博多丸に乘込み、直ちに事務長の案内にて上等船室に入り、其より兵庫県庁より来れる有吉参事官以下数百の祝送者に一々鄭重なる告別あり。同じく十二時神戸解纜、馬関に向ふ。此日幸に快晴なりしたため一行各々甲板に出で須磨、明石の風光を賞しつゝ、談笑湧くが如し。午後七時食堂に入り、九時眠に就く。

二十四日、木曜日、晴天、午前四時頃、遙に門司海峡を見る。同五時三十分入港、投錨後朝食を終へ、九時九州有志者よりの出迎船に乗じ、一行直ちに上陸し沿道に群集せる出迎人に擁せられ、旅館石田組に入り投宿し疲労を慰す。此上陸の前後に於て、門司の有志者より二十一発の煙火を打揚げ、海岸に群集せる老若男女其数大凡五百余名、出迎船には各々奉送と記せる旗を翻へし、一時は中々の賑はひなりし。各宗派を代表して、当地迄見送られたる臨濟の後藤氏、真宗の土屋氏は此処にて、正副使に告別し、此日の夜行汽車にて帰京の途につかれたり。

二十五日、晴天、金曜日、午前六時起床、正使の旅館より本日午

後五時本船に帰るとの報知あり。午後四時、副使三名は別船に乗じ正使に先ちて本船に帰る。此日九州の信徒より、三名の副使に菓実三籠を贈進せり。午後五時事務長報告して曰く、明朝八時掛錨、香港に向ふと。

二十六日、午前晴天、土曜日、午前六時起床、洗面して甲板に出で門司、馬関の風光を遥望しつゝ、心には竊に此山川に対して暫らくの別を告げ、了て食堂に入り、再び甲板に出づれば馬関より郵電局の小蒸汽、郵船会社の見送船等出で来りて、船客を始め船員に別を告ぐ。見送の為め来れる大谷派の石川舜台氏も亦此に別を告げて帰京の途につけり。同じく八時、船は錨を門司港頭に解き、汽笛一声鉄輪波濤を蹴て徐々進航す。正、副使を始め随員、船員悉く甲板に出で別を故国の山川に告るものゝ如し。余も亦双眼鏡を手にしつゝ、遙に東方に向けて帝国の万歳を祝し、又北方に向けては病床に在る慈父の快癒を黙禱しつゝ、笹尾、大山の諸峰に送られ、名にも高き玄海灘へと航進せり。此日朝来晴天なりしも、午前十時頃より天少しく曇り、午後一時頃より風雨襲来して甲板を洗ひしが、夜に入りて強風暴雨襲来して船体の動揺愈々甚だしく、六千四百屯の巨船もさながら枯葉を浮べたるが如し。九時入浴、直ちに臥床に入る。

二十七日、日曜、朝、雨、午前十時頃より晴天、六時起床、前夜動揺甚だしかりしたため、余は朝の食卓に就かず。中等船室にある随行員の半は多少不快の体なりしも、上等室の正副使以下の人々は皆壮快にして朝来散歩に余念なし。本日航進する位置は、東経

百二十五度五十一分、北緯三十度二十分、支那の寧波（杭州）と琉球の間にあり。寒暖計七十二度、此日終日、波濤洶湧して船体の動揺頗る甚だしく、四面茫茫として其際涯を見ず。九時臥床に入る。

二十八日、月曜、晴天、午前六時半起床、洗面して前田老師を訪ふ。時に師は甲板に出で正使を始め藤島、日置、南條の諸師と快談、酣なりき。余も亦其傍に待す。忽ち数羽の白鳥飛び来るを見て、始めて陸地に接近したるを覚ふ。本日午前、高島医学士より正使副使を始め随員皆種痘を受く。正午、食堂に本日の航路を揭示せり。曰く東経百二十一度四十八分、北緯二十六度三十三分、寒暖計七十六度にして廈門と福州の中間にあり。午前九時頃より少しく暑気を覚ふ。本日は真宗開祖の命日なりとて、上中等の船客に合せて十二名の精進料理を注文せり。午前九時頃より少しく暑気を覚ふ。午後二時頃、四面渺茫たる大海に一葉の孤舟に棹して漁船の浮ぶを見る。午後八時より日置副使、南條博士の二氏を中等食堂に請じ、講話を聴く。蓋し当日は、曹洞の承陽大師、真宗の見真大師の諱日に当れるを以て、特に二氏の講話を望みしなり。時に南條氏は、国文中の仏語と云ふ題にて六波羅密の事を弁ぜられ、日置氏は大智偈頌中の一則を拈提せらる。了て茶菓の饗あり。聴講者は新法主以下、前田、藤島の二副使を始め高島医学士、藤岡文学士、同乗込の某陸軍少佐を并に随行員一同と、其他船員の重なるもの等総て四十余名なりき。了て入浴、十一時眠に就く。

二十九日、火曜、晴天、午前六時半起床、洗面して前田氏を訪へば、師は既に眠を破りて袈裟を掛け、珠数を手にしつゝ、静に誦経せらるゝを見る。七時頃、双眼鏡を手にして四方を遙望すれば、一隻の帆前船の駛走するを見る。朝食後、甲板に出れば、英国汽船の大凡三千吨許りなるもの、赤塗の煙筒より黒煙を吐きつゝ、本船に尾して香港に向ふを見認む。此日正午の航路は東経百七度四十四分、北緯二十三度三十五分の間にありて、寒暖計は八十度を示せり。午後三時奉迎使の一行十八名、上等甲板に出で撮影す。箕踞するもの、直立するもの、或は安樂椅子の上に立つもの、其状万態一種の奇観は此数分時の間に演ぜられたり。明朝八時香港に着する予定なるを以て、一行各々書状を認むるに急なり。午後七時頃より天少しく曇り、微雨甲板を沾す。十一時日本に送るべき書状十通を認め終りて臥床に入る。

三十日、水曜日、晴天、洗面後甲板に出れば、群島の諸所に兀立するを見る。六時三十分太陽將に出んとする時、千三百三十里の航程恙なく輝々たる旭日旗を高く檣頭に掲げつゝ、香港に着し、船は何時しか港内の水深き処に投錨せり。抑も香港は広東省の海岸に沿ふて横はり、長十一里、幅五里乃至二里、周圍二十七里、北緯二十二度十二分、東経百十四度三分に位し、澳門を隔つる四十里、広東を去る九十里の所にあり。地勢は東より西に延び、前は洋々たる蒼海、波静にして鏡の如く、後は峻山連峰起伏して埠頭の状我箱館港に似たり。港湾は幅員方十里、四圍の群島相擁して左右の両岸高く海中に突出し、帆檣林立、朝に入るもの夕に去る

もの、黒煙天に漲りて汽笛の聲、絶間なきは、実に歐亜貿易の中心として、世界に有名なる良港たるに愧ぢずと云ふべし。

香港は尚新開に属するを以て、名所古跡の記すべきものなきも、今より二百五十年の昔、明朝の遺臣、難を避けて此地に來り。中華歴世の榮花、一朝醒めて夢の如く、廻瀾の希望、既に絶て、身は亡国の臣となり、雄志遙に故城の天に馳するも、身は香港海峡を離るゝこと能はず。空しく孤月に対して千古の恨を留めし所、今も尚古を忍びて涙に袖を沾す征人多しとかや。

而して一国施政の要素たる公共の建築物一として具備せざるなく、図書館、博物館、学校、寺院等は其規模宏大にして、能く整頓し中にも高等裁判所、郵便局、公立病院、海軍病院、瘋癲病院、中学校、中央市場、市會堂、監獄、警視庁、陸海軍兵營等は其重なるものにして、殊に市會堂、セントジョージ寺院の如きは其壯觀全島を圧す。

抑も香港の英領となりしは一千八百三十九年、彼の有名なる阿片戦争の結果、遂に一千八百四十二年の南京條約に依り英国に譲与し、之と同時に英国は港を開きて自由貿易港とし、同年五月一日、各国に通牒して国旗を翻へし、同四十三年一月六日、英清兩國の批准始めて終り、茲に香港は、尽未來際行て歸らぬ英国政府の版図に歸することとなれり。

此日午後、一行上陸する予定なりしも、目下「ペスト」病非常に流行し、一週間に平均五十人の患者を出すと聞き、俄に其上陸を停止し、一行は甲板に上りて、各々双眼鏡に香港の風景を収め

つ、此日を送ることとなりぬ。(未完、五月三十日香港着の日、博多丸に於て)

三十一日、木曜日、曇天、午前十時頃より微雨来る。当日九時頃より新門主を始め一行打揃ふて上陸したるも、前田師と余と忽滑谷氏とは上陸を見合せたり。正午甲板に掲示あり。

明朝未明当港解纜、新嘉坡に向ふ。博多丸

と午後四時頃、各奉迎使に面接したるに、一行暹羅に至り仏骨授受を終らば、更に印度に出で仏陀伽耶を巡拝すとの談あり。同四時四十分頃、香港駐在領事上野喜三郎、盤谷府駐在日本公使館書記官篠野乙次郎の二氏来訪、奉迎使に面謁せらる。同五時頃大雨車輪の如く降る。午後十一時臥床に入る。

六月一日、金曜日、曇天、午前八時頃より微雨来る。朝六時三十分頃甲板に出れば、船は既に錨を抜て香港を距る三里の沖を駛走せり。午後四時二十分頃より大雨来る。前夜より羅馬加特力教の老僧二人、露西亞人一人、独逸人一人、英国婦人一人、同小兒三人、乗船吾等一行と同室す。正午の航程は、

北緯 二十一度十四分、東経 百十三度三十四分

寒暖計 八十二度

午後十時、洗浴後、直ちに臥床に入る。

二日、土曜日、雨天、六時四十分起床、朝来大雨至り、猛風吹き、船体動揺甚し。正後の航程は、

北緯 十六度四十九分、東経 百十一度六十三分

寒暖計 八十二度

午後十時、臥床に入る。

三日、日曜日、晴天、七時起床、朝八時頃より午後四時頃迄本船を距る十里の距離に、安南大陸を認めつ、駛走す。正午の航程は、

北緯 十二度十三分、東経 百零九度四十八分

寒暖計 八十九度

午後二時頃、本船の右舷に当り、英国石炭船の駛走するを認む。同八時より乗合の陸軍少佐竹内藤太氏発起となり、上等食堂に於て藤島、前田の二奉迎使、南條博士の三氏を請じ法話会を開きたるが、席上藤島氏は、宗教の道德なる題にて一時間余の演説を試み、二席目に前田師は仏骨奉迎に關して奉迎後の抱負を演説せられ、終りに南條博士は起信論中の因縁和合と云ふ題にて五十分間程の法話あり。終りて一同に茶菓の饗ありたり。聴講者は去月二十八日に出席したる人々なりし。同十一時臥床に入る。

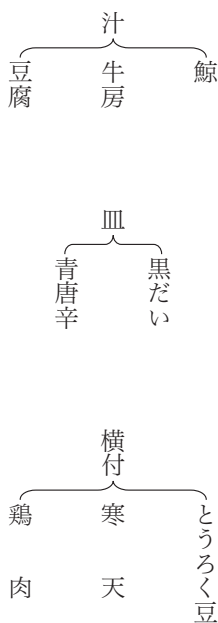
四日、日曜日、晴天、午前六時起床、朝来海上極めて平穩にして、恰も油を流したるが如し。赤道に接近せしため、溽暑実に甚だしく一行中にて始めて此地を通過するもの皆其炎熱の苦を訴へざるものなし。九時三十分、火夫長の案内にて機械室、石炭艙、氷製造所、電気灯の発電所等を巡覽し、其結構の緻密にして其壯麗なる構造に驚けり。殊に機械室の如きは平均温度百十五度に於て、一行中にて入室したるものは余と松見山本三人に過ぎず。一度室に入らんか、直ちに流汗淋漓として久居細覽に堪へず。特に石炭竈の如きは烈火炎々として、所謂焦熱地獄も斯くやあらんと思

ふ許りなりき。巡覽終りて室外に出れば、被着の洋服は恰も水に浸したるが如し。正午の航路は、

北緯 八度六分、東経 百零七度四十一分

寒暖計 八十七度

午食は一同日本料理を喫せり。



等なりき。異域の海上にありて此珍味を食ふ。亦一興なり。午後四時、東本願寺の浅井氏と荷物艙に入り、国王陛下に贈呈の物品を点検し上陸の際の用意をなす。同五時頃本船の右舷に当り、外国汽船の大凡四千屯計りのもの黒煙を吐きつ、南に走るを見る。

同十時、臥床に入る。

五日、火曜日、晴天、朝来少しく風ありしも、暫くにして快晴となれり。正午の航路は、

北緯 三度五十六分、東経 百零五度四十五分

寒暖計 八十四度

午後二時頃、四五の島嶼を正東数十里の処に認む。是れ「アナンバス」島ならん。久しく食はざりし芭蕉の実、食卓に登る。珍味可掬、十時半臥床に入る。

六日、水曜、晴天、朝六時起床、朝来上陸の用意に忙はし。午前

十時、入港投錨。領事中山嘉吉郎氏、西本願寺布教場開使佐々木千重、曹洞宗僧侶積種某並に在留邦人十余名小蒸汽を駆て本船に來られ挨拶あり。同十一時、新門主以下一行出迎の小蒸汽に乗じ上陸。数輛の馬車に分乘し「ラフェルス、ホテル」に投宿。午後六時、藤島、前田の二師並に忽滑谷、余の四人、西本願寺の開教場を見、次で郊外を散歩す。午後七時頃、中山領事及び日本人総代等訪問す。当日は英杜戦争に於て英軍勝利を得たる祝なりとて毎戸英国旗を掲げ、夜間には数万の支那人、鐘、銅鑼、等を叩きつ、市中をねりあるきつ、祝意を表するを見る。十一時臥床に入る。

七日、木曜、晴天、「ラフェルス、ホテル」に滞在。朝来印度の仏教信者、数名、奉迎使慰問のため來訪す。同十時、中山領事の招により一行悉く馬車を駆て領事館に至り、茶菓の饗を受け、午後一時帰宿。明朝乗船の用意をなす。午後十一時臥床に入る。

八日、金曜、晴天、午後四時起床、洗面後直ちに行李を調べ、六時馬車を駆てジョンズペヤー波止場に出で、盤谷行の汽船「シンガポール」号に乘じ、七時抜錨、暹羅を指して進航せり。恰も本船には暹羅国王の庶子、アパコーヌ親王御乗船あり。親王は今を距る七年前英国に留学し、彼地の海軍兵学校にありて修業し、殊に水雷発射の名手を以て同国の陸軍省より二万五千円の賞を得られたりと云ふ。正午の航路は、

北緯 一度三十二分、東経 百零四度二十六分

午後十時臥床に入る。

九日、土曜、曇天、朝六時起床、朝来馬来群島を左舷に望見しつゝ、駛走す。正午の航路は、

北緯 五度二十五分、東経 百零三度四十四分

一行終日甲板に出で、或は読書するもの、或は滑稽を、或は談話するもの三々五々一団となりて此日を送れり。此夜炎熱のため臥床に入る能はず。余は独り毛布を被りて甲板に臥す。

十日、日曜、午前晴天、午前五時甲板の洗除に目を醒して起床。

洗面後甲板に上れば、四面渺茫として島嶼を見ず。安楽椅子に依りて読書す。午後四時三十分頃より大風鯨波俄に起り、船体の動揺益々甚だし。徐やく暁天に至りて止む。此日正午の航路は、

北緯 五度二十五分、東経 百零三度四十四分

十一日、月曜、晴天、朝六時起床、本日は暹羅へ着する予程なるを以て、一行各自に上陸の用意に忙がはし。正午の航路は、

北緯 十二度三十一分、東経 百零四十二分

午後六時四十五分、船は愈々媚南河メナムの口に入り黄昏の頃、盤谷府を距る十六里の下流「バクナム」に進み、是にて投錨せり。時に十時十分なりき。此時、先に新嘉坡より同乗せし親王は数百の貴族に迎へられ、小蒸汽に移り玉ひ、一行も亦次で上陸せんとせしも、公使を始め在留人も明朝上陸の考なれば、是非に今宵一夜を此にて明しくれと。先に「バクナム」迄出迎ひし在留人某の希望に任せ余儀なく、甲板に出で蚊にせめられつゝ、一夜を明せり。

十二日、火曜、晴天、午前五時起床、一行各々服装を調べ、一時も早く上陸せんと用意するや午前八時と云ふに、文部省より、二

名の官吏は小蒸汽一艘、外に「ボート」二艘を曳ぎ出迎へ、次で、公使館よりも時田書記生、内藤警部の二名の出迎に接し、九時四十分頃、一行悉く小蒸汽船に乗り、媚南河を遡ること二里許の処に上陸するや、在留邦人を始め暹羅の官吏十余名、棧橋に出で出迎ひ煙火を打上るを合図に十三輛の馬車に分乗し「パリス、ホテル」に入り暫時休憩し、十二時頃、大谷正使、南條博士は公使館に、前田、藤島、日置の三奉迎使及其随員は、「オリエンタル、ホテル」に、大谷派の随行者十余名は「パリス、ホテル」に宿せり。午後四時、各奉迎使は公使と俱に文部大臣、外務大臣、軍務総督、外務次官等を訪問し、帰途日本公使館にて菓石の饗応を受け、午後十時帰館せり。

十三日、水曜、晴天、午前十時文部大臣侯爵バスカラヴオングセ氏来訪、昨日の答礼あり。午後四時、当国新派の管長をピー、チヤイナー、ガラム寺に訪問し、茶菓の饗を受け、次で釈尊の大像を拝観し終て「パリ」語学校を参観し、其帰路、工部大臣、地方大臣の二氏を訪問し、一応帰館の上午後七時、更に馬車を駆て文部大臣の晩餐会に赴き、十二分の饗を受け、午後一時頃帰館せり。

十四日、木曜、晴天、午前六時起床。同九時仏牙塔「ワット、サケット」を拝観す。塔は海面を抜くこと九百尺、悉く煉瓦を積み上げて作りしもの。一度其塔の頂上に上れば、盤谷府を一目の下に見ることを得べし。毎年十一月十五日より三日間にて祭礼あり。此時は仏牙を王宮より此処に運び来りて礼拝せしむ。此れ暹

羅の国祭にして、其盛なる國中亦此時を出でずと云ふ。帰路、内大臣并に旧派マヘキヤの管長をチャン寺に訪問し、次で積尊の大寝像を拝観す。午後四時国王陛下に謁見のため一同公使館に参集。間もなく宮内省より迎のため、美麗なる二頭立の馬車三輛来る。第一に大谷正使、稲垣公使、第二に前田、南條の二師、第三に藤島、日置の二師分乘し、次で随員の雇馬車六輛、其尾に接し参内、王城第二の門にて下車、直ちに休憩所に入り、此にて内閣各大臣を始め宮内省の高等官等の挨拶あり。其より宮内大臣の先導にて謁見所に入る。時に国王既に出御あり。微笑を催し給へり。一同整列するや文部大臣一々奉迎使を国王に紹介し、次で左の勅語ありたり。

仏世尊の神聖なる遺形の一分を受取らんが爲めに、始めて此国に来れる。日本仏教徒の奉迎使を見ることは朕の喜ぶ所なり。且つ日本は、暹羅よりは遠隔の国にして制度も習慣も或る場合に於ては異同なきに非ざれども、尚同一宗教を信ずる所の同教國なることを信認することに於て、満腔の歡喜と満足の感情とを以て刺撃されたる熱心の程を領解ありたきことなり。朕は仏教の先導者にして、保護者なることを承認せられし上は、奉迎使へ神聖なる遺形を分配すべき、幸福なる義務を尽すことは、甚だ喜ぶ所なり。従前日本仏教徒が、此神聖にして真実なる遺形の分配を得ざりしことは、彼等が其一分を得んことを欲望すべしとは、朕の識認せざりしが故なり。今は此貴重なる宝物の一分を得て、日本に安置し巡拝者をして其便を得せしめんとす

る。彼等の願を信認せし上は、之を手渡しすることは甚だ喜ばしきなり。

奉迎使の此国に來り、且つ普通協同の利益の爲に、開明の事業に倦怠なき尽力の程は朕の感謝する所なり。日本仏教徒が海外仏教徒を熟知し、一層交際を親密にしたる後は日本仏教の益々、隆盛に赴くことは、朕の最も切望する所なり。

右の勅語は暹羅語にて仰せられ、文部大臣英訳して之を南條博士に伝へ、同師より各奉迎使に伝へたり。次で大谷正使は、左の答辭を捧読せり。

大日本帝国仏教各宗派ヲ代表シタル真宗大谷派大谷光演、真宗本願寺派藤島了穩、臨濟宗妙心寺派前田誠節、曹洞宗日置黙仙、謹言ス。

大暹羅国王陛下聖徳天ノ如ク高く、仁沢地ノ如ク潤シ、爰ニ優渥ナル聖慮ヲ降シ、釈迦大覺世尊ノ遺形ヲ我日本帝国某等仏教者ニ頒与シ玉フニ依リ、各宗派管長ハ光演ヲ奉迎正使ニ、了穩、誠節、黙仙等ヲ奉迎使ニ撰用シ遺形奉受ノ任ヲ囑托セリ。光演等此任ニ膺リ、聖明ニ咫尺シ玉体ノ清爽ナルヲ拝スルヲ得タリ。何ノ栄カ之ニ加ヘンヤ。伏シテ望ム。陛下外護ノ力ヲ増隆シ玉ヒ、十善ノ資ヲ保有シ玉ハンコトヲ。光演等誠恐誠懼ノ至リニ堪ヘス。

捧読終るや、南條博士は再び之を英訳して奏上し、次で陛下は親しく四名の奉迎使に握手の礼を賜はり、是にて一同退出。陛下は各奉迎使の出るまで玉座にありて目送し給へり。其より奉迎使及

び随員は参内簿に一々記名し、茶菓の饗を受け、六時五十分再び前の馬車に乗り王城を退出し、帰路、内務、大蔵、農務の三大臣を訪問し八時帰館せり。

十五日、金曜、午前晴天、午後雨天、此日午前九時より公使館にて奉迎使の会議あり。午後四時仏骨拝受のため一同公使館に参集。奉迎使以下十余輛の馬車に分乘し、其式場「セタバナー」に至る。午後五時同所に着、直ちに総門を入りて第二第三の門を通し本殿に至れば、文部大臣以下数十名の同国官吏等に信徒等堂に充満せり。暫時休憩の上一同式場に着席するや、文部大臣先づ起立し、次で一同総起立す。此に於て大臣は、左の式辞を暹羅文、英文の二通に認め、第一に暹文、第二に英文を捧読せり。

帰依シ奉ル彼如来、応供、正等覺、大慈大悲大知識ノ仏陀ニ敬礼シ奉ル。

大長老並ニ日本国ノ尊敬スベキ奉迎使及ビ列席ノ紳士ニ頓首ス。

仏教ノ大保護タル我大君主陛下ノ優渥ナル勅旨ニ基キ、余ハ大聖釈迦仏ノ御遺形ヲ日本奉迎使タル諸師ニ授与スルコトノ御名代トナリ。余ノ大名誉ニ就テ深く感動セル所ロヲ陳ベザルヲ得ズ。此幸福ナル機会ニ遭遇セルコトハ、余自ラ最モ幸榮トスル所ニシテ、現時吾叡聖ナル仏教君主ノ下ニ於ケル吾国民ガ此大宗教ニ対スル熱誠ハ、南北両宗ノ伝播セル仏教國ニ著明ナルコト亦自ラ誇ルニ足ル。

大聖ノ御遺形ガ如何ニシテ発見セラレタルカヲ縷述スル要ナ

ク、又御遺形ト共ニ顕出セル碑銘ガ、慥ニ我大聖世尊ノ御遺身タルコトヲ証セルヲ告グベキ要モナシ。

此等ノ事情ハ「ローヤル、アジヤチツク、ソサイエター」ノ記述ト、吾国王陛下ガ仏御遺形頒与ニ当リテ印刷ヲ命ジ玉ヘル文書トニ依テ諸師ノ知ラル、所ナルベシ。

昔大聖世尊御入滅ノ当時ニ遡リテ御遺形ヲ頒チシ状況ヲ追想シ奉リ、今我仁慈ナル仏教國大君主ノ優渥ナル叡慮ヲ蒙リテ御遺形ヲコ、ニ頒与スルコトヲ比較セバ、我等ガ宗教和融ノ聖代ニ遭ヘルコトヲ感謝セザルヲ得ザルナリ。

尊敬スベキ日本ノ奉迎使諸君ヨ。余ハ今叡聖ナル大君主陛下ノ旨ヲ帶シ、コ、ニ世尊ノ御遺形ヲ授与スル幸榮ヲ得テ欣喜セリ。尊敬スベキ諸師ハ注意シテ之ヲ本国ニ齎シ、之ヲ蔵シテ仏教徒ヲシテ普ク礼拝スルコトヲ得セシメヨ。

名誉アル尊重スベキ奉迎使諸師ヨ。希クハ三宝ノ加護ニ依テ、聖形ヲ持テ幸福ニ安全ニ滞リナク帰朝セラレンコトヲ祈ル。

右捧読終るや、大谷正使は奉迎使一同に代り左の答辞を朗読せり。

爰ニ我教主釈迦大覺世尊ノ遺形授受ノ盛式ヲ拳ゲラレ、添ルニ懇篤痛切ナル式辞ヲ給フ。光演等此機会ニ遭遇スルノ榮何モノカ之レニ加ヘンヤ。蓋シ道ニ南北アリ、人ノ機根ニ殊別アリト雖ドモ、光被スル所ノ慈悲解脱ノ途ハ一ナリ。之ニ依リ将来益、日暹両國同教和親ヲ厚フシ、世尊ノ遺誠ト大暹羅國王陛下ノ勅意ヲ全フセンコトヲ望デ已マザルナリ。

大暹羅國王陛下ヲ始メ文武百官諸公ノ我奉迎使等ニ對セラル、好意ハ、光演等深ク感銘ス。之ヲ本國ノ同教同胞者ニ傳達スルコトアラバ、彼等ノ欣喜シテ貴國ヲ敬慕欽仰スルノ念一層切ナルベキヲ信ズ。且ツ遺形ハ仏陀ノ光明ト共ニ永ク護持保全シ尊重礼讃スベシ。光演等本國仏教各宗派管長ヲ代表シ、爰ニ謹デ大暹羅國王陛下ノ万歳ヲ祝シ、兼テ陛下臣民ノ幸福ヲ祈ル。謹デ答辭ヲ呈ス。

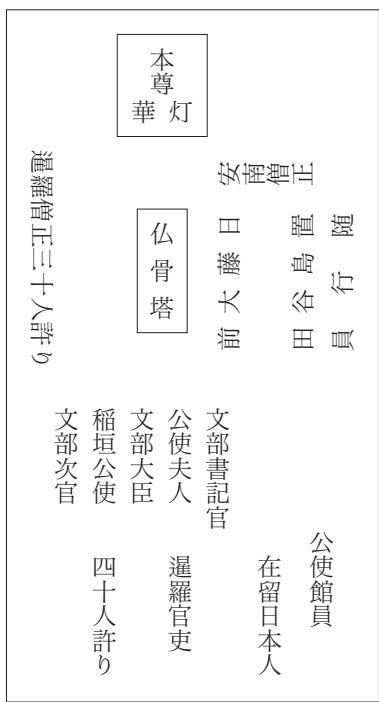
大日本明治三十三年六月十五日

奉迎正使 大谷 光演
 奉迎使 藤島 了穩
 奉迎使 前田 誠節
 奉迎使 日置 黙仙
 謹白

朗読了て奉迎使一同、仏骨塔に対して読経拝礼あり。此にて文部大臣自ら仏前に安置したる高さ五寸位の金塔内より又一の小金塔を出し、奉迎使四名立会の上、其小金塔を開き、御遺形を示しつつ、親しく授受し、了て着席するや暹羅の僧正大凡三十人許一同に、仏塔に対し拝別の読経あり。其梵唄の清朗なる声は堂内に響き渡りて、実に殊勝を覚へたり。此にて式全く了り、各奉迎使は、本国より持参したる宝珠形の仏塔内に金塔を納め、更に金剛の袋に之を納め、又其を二重の桐箱内に納めて本尊前に安置して別室にて茶菓の饗を受け、次で文部大臣と四名の奉迎使並に南條師、稲垣公使の七名堂前に起立して記念のため写真師をして撮

「前田奉迎使渡航日記」について

影せしめ、了りて寺塔を拝観し、六時三十分、前田奉迎使は御遺形を納められたる箱を捧持して寺内を出で、第一に大谷正使、第二に前田師は仏骨を捧持したる俣馬車に乗じ、第三に藤島、日置の二師、次に公使館員を始め随員一同其尾に付して公使館に帰り、直ちに奉迎使立会の上仏塔に封印し、帰朝の上各宗管長に引渡す迄開塔せざることとし、仮に公使館の接賓室の上段に安置し奉りて帰館せり。其授受の際の席次は左図の如し。



当日寺院に至るの途驟雨俄かに至り、一行皆法衣を沾し、大いに困難を極めたり。

十六日、土曜、晴天、午前九時一行公使館に至り、文部省視学官の案内にて宮中の寺院「ワット、プラケウ」を拝観す。寺は王城内二重門の内において、其結構の壮麗に美を尽し、善を極めたる日本にても亦観がたし。本尊の釈迦仏は翡翠の寶石を以て作られたる高さ三尺、横一尺七八寸の座像にして、先朝の末王「ピヤタ

ク」が老オキ撻タより伝来せし靈仏にして、其貴重なる全暹羅国よりも
 価の上に於て高く、実に此国の最重宝なりと云ふ。又其堂内の美
 麗にして莊嚴の行届きたる、又其左側に高さ百五十尺に近き黄金
 塔あり。日光に反影して目もまばゆき許り、其又右側に当り、高
 さ金塔に等しき殿堂二ありて、其堂の棟に数百の風鈴あり。南風
 に和して鏘々金玉の声を発し、堂内には、敷瓦に代ゆるに銀板を
 敷つめ、堂側には蓮池ありて、四時絶へず花笑を洩して三世の諸
 仏を慰め奉る有様、所謂極楽浄土も斯くやあらんかと思ふ許りな
 り。殊に其間に通ずる四方の廊下には、壁に釈尊の御生涯を書
 き、其角々には獅子、或は象の模型を置きて守護の意を示した
 り。其より第三の門に入りて、国王陛下が臣民に謁を賜ふと云ふ
 謁見所を拝観し、何処も目を驚すばかりの壯嚴美麗に、此にては
 日光山の壮美はととも及ばず、今迄見下し居たる暹羅の国も中々
 に侮とり難しと口々に語りつゝもと来し第二の門に出れば、白象
 二頭、黒象二頭に各々二人の官吏を乗せ、駛者らしき者に引かれ
 つゝ、一行の前に来りて幾度か鼻を上下し、最後に一行に向て敬
 礼するものゝ如くして、去れり。其より王城を出て博物館に至れ
 ば、館長は予て用意の休憩所に案内し、茶菓の饗をなし、其より
 博物館に至れば、熱帯国の猛獣は悉く剥製にして陳列せられ、其
 他各国の陶器、衣服を始め武器に至るまで、麗はしく羅列せら
 れ、殊に日本の陶器部には尾張産の物多く列ねられ、衣服の部には
 日本の旧式の軍服、扱は巡查の制服制帽、又法衣の部には真
 言、浄土の袈裟、法衣を見、又其武器の部には徳川時代の甲冑幾

組となく陳列せられたるを見る。館長の行届きたる案内を謝し
 つゝ、十二時三十分、同館を出て帰宿。昼飯後午後三時、又一同
 馬車を駆て司法大臣ラヂユプリー親王を訪ひ暫時閑談、茶菓の饗
 を受け、其より馬車を郊外に駆りて親離宮外の寺に至る。此寺は
 今王を距る五代前の国王が創立し玉ひたる有名の寺院なりしも星
 移り物変り、先年崩壊せしを以て今王の勅願に依り、即今再建中
 なりと云ふ。堂内の本尊仏は金銀銅の混合を以て作りたる物にて
 一種の特色ある光彩を發てり。其側に仙人様の石像あり。是は今
 より七年以前に於て印度に発掘したる聖像の模型なりと。堂を出
 て橋を渡りて作事中の建築物あり。是は巴利語パリに秀逸なる僧侶を
 国中より選拔し研究せしむる巴利語パリに於ける最高の学校なりと。
 其より又馬車を駆て「リュシット」の新離宮に至り、此にて国王
 陛下より御茶を賜はると云ふ筈なりしも、生憎降雨のため出御な
 きを以て休憩の上、馬車を連ねて帰館、十時水浴を了りて臥床に
 入れば、夢は「リュシット」の離宮に遊びて、転た盤谷の風塵を
 厭へり。

十七日、日曜、朝曇、午前十時頃より晴天、午前五時枕を蹴て床
 を出で、時刻に遅れじと馬車を駆て、公使館に出で、此にて日本
 流の朝食を調へ七時、停車場に至り、旧都「アユチャ」に遊ぶ鉄
 道は広軌にして、乗客を容るゝ日本の倍なるも、其燃料はチーキ
 材の小片を以てするが故に速力の遅きを覚ふ。殊に盤谷府より
 「アユチャ」迄三十里、其通過する道側は茫茫たる千里の旷野に
 して、青田には水牛幾百頭となく養はれ、其間に椰子、芭蕉の熱

食後陛下には奉迎使並に文武官を率ひて喫煙室に出で給ひ、大仏像一軀を日本各宗僧侶並に信徒に、又其小仏像を大谷正使に賜ひ（仏像の由来は別記す）、左の勅語を一同に賜へり。

日本仏教各宗派ガ協同一致シテ神聖ナル積尊ノ遺形ヲ奉迎スルコトハ、朕ノ甚ダ喜ブ所ナリ。将来益其協同力ヲ堅固ニシテ有益ノ事業ヲ興起シ、宗教上ノ利益ヲ普通ナラシメ、最初ノ一念ヲ貫徹スル様ニアリタキコト、朕ハ同一宗教ヲ信仰スル上ヨリ深く希望スル所ナリ。奉迎使ハ已ニ此地ニ於テ作スベキ事ヲナシ了レリ。今後ハ我等ノ宗教ガ、益日本ニ於テ隆盛ニ赴クベキコトハ信ジテ疑ハザル所ナリ。尚今後宗派ノ協同一致シテ布教ノ策ヲ計画スルコトニ於テ助力スベキ事アラバ、朕ハ前二モ云フ如ク、同一宗教ノ信仰上ヨリ如何ナルコトヲモ辞セザルベシト貴師等ニ約束ス。

今日朕ガ日本仏教徒ヘ寄贈スル所ノ仏像ハ、今度受取ラレシ積尊ノ遺形安置ノ処ニ同ク安置アリタシ。王后ヨリモ三蔵聖經ノ写本ヲ寄贈スベキ筈ニテ之ヲ入ル、所ノ錦囊ヲ手製中ナレバ、此ハ後ヨリ差送ルベシ。

御遺形ハ大切ニ護持シテ無難ニ本国ニ帰着シ、速ニ奉安所ヲ定メテ之ヲ尊敬セラルベシ。尚海路平安、諸師健全ニシテ帰国セラレンコトヲ望ム。

勅語了るや、各奉迎使は其優渥なる聖旨を一々拝謝し王城を退出、一応帰館の上「ワット、サムチン」と称する寺院に於て、在留日本人死者数十名のために読経回向し在留邦人悉く参詣せ

り。此夜午後九時より公使館に於て夜会あり。招かれて至るもの暹羅の皇族并に各大臣を始め欧米各国の公使、奉迎使及び其随員等にして、煙火を打上げ数千の球灯をつるし、公使館員一同如才なく接待せられ、午後一時三十分、十二分の飲を得て帰途につけり。

十九日、火曜、晴天、朝六時起床、一行出発の用意をなす。午前九時奉迎使一同公使館に赴き、告別す。時に宮内省より各奉迎使へ金製一、銀製二、銅製一、都合四個の記念章を廻送し来り、間もなく文部大臣来館一々伝達あり。（記念章の由来は別記にあり）又文部大臣より高さ八寸位の仏像を各奉迎使并に僧侶にして随行員たるものを送らる。余を始め本願寺の家従三名、高島医学士、藤岡文学士、山本通訳の七名は俗人なりとて贈られず、時十二時に近ければとて公使より昼食の饗を受け、午後一時政府より差廻しの小蒸汽船来りければ、奉迎使一同仏の御遺形を擁衛しつ、文部大臣を始め公使、領事を始め館員一同之に便乗し、数里の下流に停船せる独逸汽船「コーラット」号に移れり。於是仏骨は大谷正使之を護衛し、其船室の上段に奉安し、次室に藤島、前田の二師、其向側の室に日置、南條の二師、船室を取り擁護の任に膺れり。文部大臣奉迎使一同に対し、左の言を語れり曰く。

此度諸君ノ帰朝ト俱ニ、陛下ヨリ奉迎使ヲ貴国迄送ラル、管ナリシモ謙未ダ決セズ。且ツ諸君ノ滞留、意外ニ短カ、リシタメ、本船ニテ同行スル能ハズ。香港又ハ上海ニテ同行スルヤモ知レズ。乞フ其意ヲ諒セラレタシ。

との言、帰路新嘉坡より印度の仏蹟を巡拝する予定なりしも、船中にて会議の上奉迎使と行違ふことあらば面白なしとて、俄に印度行を見合すに決せり。午後二時二十七分、抜錨徐々進航をなせり。棧橋の上には文部大臣、公使、領事、時田書記生、内藤警部を始め在留日本人二十名許り、或は帽子、或はハンカチーフを打振りて惜別の情を示せり。四時三十分頃、船は媚南河を離れて暹羅湾内へ出で、同七時頃降雨一過、甲板を洗ひ身は頓に清涼を覚へたり。然れども本船には、新嘉坡行の牛大凡二百頭許りを搭載せしを以て、其喧囂と悪臭は日を経る毎に加へ、一行大るに困難を感じり。十時船室の玻璃窓に映ずる明月に懐郷の情を慰めつゝ臥す。

二十日、水曜、雨天、午前六時起床、七時三十分、右舷に当り、一箇の灯台と相併びて四五の群島を見る。此処に商船大凡十九艘碇泊せり。是れ暹羅領の「コーシーチャン」と称する所にして、盤谷府を距る七十里許なり。同八時荷物搭載のため投錨、先に碇泊せし十余艘の荷物は本船に移さるゝこととなり、数百の支那人足一時船内に集り来りて喧囂を極む。午後八時搭載全く終り、直ちに航路を新嘉坡に向け、抜錨一行は甲板に出で、月明の下遙に盤谷府を眺めつゝ、一片の感謝を暹羅国に贈れり。

二十一日、木曜、大風雨、朝六時起床、此日午前三時頃より天候俄かに変じて大雨雷鳴一時に来り。其物凄きこと謂はんかたなく、加ふるに舷を叩くの怒涛狂瀾は、崩岳の如く船体の動揺終日止まず。然れども幸に、満船の貨物を搭載するを以て動揺、意外

に軽く、随て一行の中眩暈嘔吐を催すものなかりしは不幸中の幸なりし。此日朝の食卓に着きしは藤島、大草、石川、高島、藤岡の五氏と余の六名にして、昼食には新門主の外に朝食に出でし人々にして晩食に至り。前田師の加はりたる位なりき以て其波濤の如何に甚だしかりしかを測知するに足らん。殊に当日は、三食とも食卓に「わく」を入れ器物の転覆を注意せり。是れ、神戸出帆以来初めてなり。

二十二日、金曜日、晴天、六時起床、朝来一同食卓に就き、互に前日の苦を語りて無事を祝す。午後在暹中の勅語を謄写す。十時臥床に入る。

二十三日、土曜日、晴天、六時起床、朝食を了へて甲板に出れば、右舷に当り雲煙模糊として一帶の連山を見る。即ち是れ馬來半島なり。午後三時頃に至り島影全く海中に没す。此日終日、風波起らず、海面油の如し。一行往を語り来を談じ、明日新嘉坡上陸の快を思ふ。

二十四日、日曜日、晴天、朝来二三の青螺を右舷五里許に認む。午後二時三十分、將に新嘉坡埠頭に入らんとして檣頭高く檢疫旗を掲ぐ。少時にして檢疫官来検す。三時四十分、船は進みて港心に投錨す。時に電光閃々雷雨一過し、雲霧深く鎖して陸上を見る可らず。五時上陸し、前田日置の二師は日本旅館松尾に、大谷派の一行は「ラベルス、ホテル」に、藤島師は本派開教場に分宿す。

抑も新嘉坡は英領殖民地の一にして、馬來半島の南端北緯一度十

六分、東経百三度五十五分に位せる長方形の一小島にして、幅十
四里、長二十七里を有す。港湾の形状殆ど我下の関に似たり。海
岸回らずに長き棧橋を以てし、如何なる大船巨船も直に棧橋に繋
留して貨物の揚積をなすを得べし。市街は広闊平坦にして清潔を
極め、白亜層稜天を摩し、其壯觀決して香港に譲らず。今を距る
百年前迄は此地も亦荒涼落漠数百の土民と若干の漁夫を以て住は
れたる寒村に過ぎざりしが、一千七百九十一年ラベルスなる人の
手によりて、始めて英国の版図に帰せしより最近五十年間に於る
進歩は洵に著しく、今は東西亜細亜海上通商の要衝たるのみなら
ず。英国が東洋に於る陸海軍の要地として甚だ重要な位置を占む
るに至れり。殊に其地勢馬來本島に接するを以て一千八百六十七
年四月殖民事務局を此に設置し「マラツカ」「ペナン」等を管轄
するに及び、更に一層の盛栄を来せりと謂ふ。在留日本人は大凡
六百余名にして、其大半は下等の労働者に過ぎず。商店として見
るべきは、只三井物産会社支店外二三に過ぎず。医師に中野某あ
り。僧に西本願寺の佐々木千重氏、曹洞宗の釈種某あり。佐々木
氏の本派の開教場にありて、昼間は学校を開きて少年を教訓し、
夜は説教をなして民心を感化しつゝあり。

二十五日、月曜日、晴天、六時起床、朝食後、前田、日置の二師
に従ひ馬車を駆て本願寺派説教所を訪ひ、次で「ラベルス、ホテ
ル」に至る。此日久し振りにて五月二十五日より六月七日迄の東
京日日新聞を読み、清国事件に関する近報を知れり。夜、忽滑谷
氏と相伴なり市街を散策す。

二十六日、火曜日、晴天、朝六時半起床、本日一行打揃ふて「ボ
タニカル、ガーデン」を観るの約あり。八時一行馬車を駆て同処
に至る。門を入ること数丁にして動物園あり。此所には虎を始め
長さ一丈に近き大蛇狸々鱈魚等熱帯地方の動物悉く飼養せられ、
又二里に近き園内には熱帯地の異草奇木悉く集植せられ、一とし
て備はらざるなし。園内の清楚風雅見るべき者あり。蓋し世界有
数の公園にして、足此地を踏むものは必ず一度観覽せざる者少な
しと。巡覽中降雨に逢ひ、急に門を出で茶店に入りて休憩す。雨
益々甚だしく、帰途博物館を廻覽する予定を変じて、直に一応車
を旅宿に走らせたり。時に十一時三十分、此日、大谷派の旅館よ
り、来る三日正午出帆の英国ピーオー会社汽船マルタ号に乗じ上
海に出づる予定なりと通知せり。

二十七日、水曜日、晴天、朝七時起床、忽滑谷君と同道「ラベル
スホテル」に至り、松見君に会見し出発の期を決す。午前十時半
頃、領事中山嘉吉郎氏一行に先だち、賜暇帰朝せらるゝに付、告
別をかね訪問せらる。午後四時領事館書記生二名来訪す。晩に至
り藤島師来訪あり。

二十八日、木曜日、晴天、六時半起床、同九時、前田、日置の二
師は忽滑谷、釈種の二氏と俱に馬車を駆て、水道の水源地并に博
物館を観覽せらる。余は前年当地の風物を觀光せしを以て行か
ず、独り「ラベルスホテル」に馬車を駆て友人を訪問し、十二時
三十分帰館す。午後一時より西本願寺説教所に於て、同所開教主
任佐々木氏の請により、日置奉迎使、南條博士の法話あり。在留

日本人數百名炎熱を厭はず、遠近より來集して聴聞せり。当日は前田奉迎使も出席せらるゝ筈なりしが、事故ありて俄かに出席を辞せられたり。

二十九日、金曜日、晴天、六時起床、当日は早天より、積種氏の請により市街を距る數里の山間に在る在留本邦人墓地に詣せんがため、前田、日置の二師は忽滑谷、積種の二氏を隨がへ馬車を同所に馭り、読経回向の後昼食の饗を積種氏の宅に受け、午後二時帰館せり。余は午前九時頃より西本願寺説教所に至り、又各所を遊覽し午後十一時半頃帰館、直ちに臥床に入る。

三十日、土曜日、朝雨天、十時頃より晴る。午前九時一行十輛の馬車に分乘し、第十二番波止場に出で、ピーオー会社所有の棧橋より同会社の汽船マルタ号に搭乗せり。見送の人々は領事代理を始め三井物産会社、三光商会、藤島奉迎使、佐々木開教使及び在留日本人の重なるもの數十名なりき。藤島奉迎使は本山の命により此処にて一行と袖を分ち巴里に於ける宗教大会に参列のため、明後日頃、出帆の仏蘭西メールにて馬耳塞マルセイユに向ふ予定なりし。本船は当日正午拔錨、香港に向ふとの事なりしも、荷物の都合にて明朝五時に延期せり。

七月一日、日曜日、晴天、朝五時拔錨。針路を香港へ指す。正午の航路は、

北緯 二度零二分
東經 百零四度四十六分
航進 八十里

午後二時頃、ラベラス及アヂヤクスの灯台を左舷二里四分の三に望みつゝ航進せり。当日は日曜日なるを以て午後四時頃、俄かに鐘を打して甲板上に船員を集め、乗組の宣教師出で来りて祈祷を捧げ、船員一同は風琴に和して讚美歌を再唱し、續て宣教師の説教あり。

二日、月曜日、午前晴天、午後驟雨一過す。昨夕刻より鳥影全く没し一青を見ず。正午の航路は、

北緯 六度十四分
東經 百零九度三十分
航程 三百零三里

当日午前八時頃、左舷に五千屯許の汽船針路を香港に向けつゝ馳走するを見る。船中中等室に支那婦人三名あり。終日団扇を手にしつゝ甲板を歩し喃々喋々す。其の年長婦人能く日本語を繰り、又年少婦人能く英語を話す。而して此中二名は、久しく英国の倫敦にありて保母を業とし、今一人は印度にありしものなりと。晩に船員蓄音器を持来りて一行を慰めたり。九時大風雨俄かに起りて舷を叩つの音物凄し、十一時に至りて止む。

三日、火曜日、朝曇天、六時起床、直ちに海水に浴し了て喫煙室にて一行各々快談を縦にす。時に突然二名の西洋人來る。その一名は英国の海軍少佐なり。一行に対し、航進の遅速を賭せんことを求む友人あり。之に応ず。正午十二時、食堂に掲げられたる航程表の結果勝は洋人に歸したり。正午の航路は、

北緯 十一度二十九分

東経 百度零二十八分

航程 三百零六里

此日終日、雲煙渺茫の中にありて一の島影を認めず、船体少しく動揺す。十時臥床に入る。

四日、水曜日、晴天、朝食後喫煙室にあり。時に右舷に当りピーオー会社の汽船大凡六千屯許のもの針路を新嘉坡に向け馳走するを認む。正午驟雨一過頓に清涼を覚ふ。正午の航路は、

北緯 十五度六分

東経 百十二度五十二分

航程 三百十二里

五日、木曜日、晴天、六時起床、午前十時頃船体白色にして、三本櫓の帆船香港に向ふて走るを見る。正午の航程は、

北緯 二十度十三分

東経 百十三度四十三分

航程 三百十一里

午後五時三十分頃、遙に東方に当り島嶼を認む。同七時三十分、右舷に赤色の廻転灯台を見る。午後十時二十分闇夜を厭はず船は進で香港海峡に入るや船尾の二発の雷火を轟発して入船を報ず。船は更に進で海峡の彼岸に当る九竜島に投錨す。時に後面の香港を眺むれば、数万の灯火は山上山下の市街に輝き、煌々として一個の不夜城を現出す。

六日、金曜日、晴天、朝来在留邦人等の出迎を受け、午後二時、当港在留邦人の歓迎会に臨む。出迎の小蒸汽には方一丈許の日章

旗を翻し、埠頭に着するや日本人総代等の出迎あり。直ちに香港

特有の肩輿に乗り、式場「ステホール」に着し、暫時休憩後、群集の日本人に対し、第一に前田師は奉迎に關しての所感を述べ、

次に日置氏は簡単に歓迎の謝意を述べ、第三に南條博士は新法主に代り法話あり。終て一同精饌の饗応を受け、午後八時見送の小蒸汽に乗り、本船に帰れり。本日領事を始め在留邦人并に奉迎事務所よりの電信にて、上海の寄港を止め長崎直航に決す。是れ清国事変の結果なり。依てモルタ号より同会社汽船ロセツタ号に明朝移転に決す。モルタ号は上海に寄港し、ロセツタ号は長崎へ直航するを以てなり。

七日、土曜日、晴天、朝食後、驟雨一過甲板を洗ふ。九時一行海峡の中央に投錨せるロセツタ号に移乗せり、時に領事を始め、在留邦人の重なるもの十数名見送のため来船す。午後四時四十五分、船は錨を抜て香港海峡を離れ、針路を東方に指せり。時に波浪少しく起り、船体を動揺す。午後九時頃より降雨あり。十一時臥床に入る。

八日、日曜日、晴天、朝来左舷に汕頭ふらんとうを見る。是れ支那の福州なり。午後三時頃、右舷に白色の軍艦一隻東に向ふて走るを認む。

此日の正午の航程は、

北緯 二十三度五十分

東経 百十八度九分

航程 二百五十一里

九日、月曜日、晴天、朝来順風なるを以て開帆の用意をなし、満

帆に風を盈充て汽力を助けたり。此日終日鳥影を見ず、頗る冷気を感じ。一行終日、安楽椅子に臥して無聊を消す。正午の航程は、

北緯 二十四度十四分

東経 百二十二度二十三分

航程 三百零七里

十日、火曜日、晴天、朝五時起床、午後波浪少しく起り白波狂湧す。船体亦動揺して不快を感じ。晩食後甲板に上れば、名も知れぬ白鳥一羽檣頭に佇立するを見る。正午の航程は、

北緯 三十度三十四分

東経 百二十六度四十六分

航程 三百零六里

明朝未明、長崎へ着すべき予定なるを以て、一行各自に行李を調べ上陸の用意をなす。然るに午後十二時頃より濃霧深く鎖して前進する能はず。長崎を距る八十里の海上に停船し暁を待てり。

十一日、水曜日、大雨、朝五時起床、九時、船は愈々進で長崎湾頭に入りぬ。始め神戸を発してより往復一万ノットに近き、航海此に恙なく使命を全ふして帰朝せし一行の喜びは云はずもかな、日本の奉迎委員并に数万の信徒が心を込めて待ち奉りたる世尊の御遺形は、京都より出迎の各宗管長総代仏光寺門跡三位華園男爵を始め有馬憲文、小林栄運、三原俊栄、名和溷海等の各宗委員并に九州各地より群集せられたる各宗僧侶及信徒より拝迎し奉り、上陸後直ちに皓台寺の本堂に奉安し、各奉迎使は読経拝礼の

「前田奉迎使渡航日記」について

後、旅館迎陽亭に入らる。此日、本派本山よりは稲葉執事、野原正法輪記者の二名、当地迄出迎へられ、周旋尽力具さに至れり。此に其好意を多謝す。又此一行として神戸より同行を忝ふし指導尽力を賜はりたる奉迎使各親下を始め大谷派、本願寺派、曹洞宗の各随行員諸君に対し、満腔の赤誠を捧げて友情の濃厚なりしを感謝すと同時に、将来の友愛を祈望して止まざるなり。尚帰朝後の光景、正法輪記者の手に譲り、余は茲に日記の筆を擱き、次号より暹羅国情の一斑を述べて、読者諸君に暹羅国を紹介し以て此日記を完結せんと欲す。